

Title	髄鞘形成に関するSema4Dの研究
Author(s)	谷口, 佳孝
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/45170
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	谷口佳孝
博士の専攻分野の名称	博士(歯学)
学位記番号	第 18578 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 歯学研究科統合機能口腔科学専攻
学位論文名	髄鞘形成に関する Sema4D の研究
論文審査委員	(主査) 教授 古郷 幹彦 (副査) 教授 上崎 善規 助教授 竹村 元秀 講師 渥美友佳子

論文内容の要旨

【緒言】

神経回路形成には多くの誘引性、反発性の軸索ガイダンス因子が関与することが知られている。そのうち、セマフォリンは約 500 アミノ酸からなる共通の Sema domain を有する大きなファミリーを形成し、これらは分泌型と膜結合型に分類されている。1996 年に Furuyama らにおいてクローニングされた Sema4D (S4D) は膜結合型分子で神経系と免疫系双方に強発現することが確認されているが、神経系における役割は不明である。本研究では S4D の生体脳における機能解明を目的として 1) 大脳における S4D の発現細胞の特定を行い、S4D がオリゴデンドロサイトに局在することを明らかとした。次に 2) S4D の欠失がオリゴデンドロサイトの成熟や髄鞘形成の及ぼす影響を調べた。さらに一過性脳虚血モデル動物を作成し、脳虚血傷害後の神経再生過程における S4D の発現変化および S4D 欠失がオリゴデンドロサイトの発現変化や再髄鞘化に及ぼす影響について調べた。

【方法】

動物 動物は野生型 C57BL/6 マウスと S4D ホモ接合子型 S4D 欠失マウスを用いた。脳成熟発達過程の観察には髄鞘形成期である 14 日齢及び髄鞘形成完了期である 60 日齢を用いた。脳損傷後の神経再生過程の検討には一過性脳虚血傷害モデルを用いた。すなわち、60 日齢のマウスを 1-3% ハロセン吸入麻酔下に右側中大脳動脈を経頭蓋的に 2 時間閉塞し、再灌流後 1、7、14 日目に実験に供した。**免疫組織化学法** 動物をネンブタール腹腔内麻酔下にパラホルムアルデヒド含有 PLP 固定液で灌流固定後、大脳を摘出しビブラトームで 20 μ m の冠状脳切片を作成した。上記切片において髄鞘蛋白である MBP (myelin basic protein)、オリゴデンドロサイトのマーカーである MAG (myelin-associated glycoprotein)、CNPase、GST π 、前オリゴデンドロサイトのマーカーである O4、オリゴデンドロサイト前駆細胞のマーカーである NG2、PDGFR α や神経細胞のマーカーである NeuN (neuronal nuclei)、アストロサイトのマーカーである GFAP (glial fibrillary acidic protein)、マイクログリアのマーカーである F4/80 および S4D に対する抗体をそれぞれ用いて免疫組織化学法ならびに S4D との二重蛍光抗体法を施行し、S4D 発現細胞を同定した。**ウエスタンブロット法** 摘出脳を可溶化し、各レーン 20 μ g の蛋白をアクリルアミドゲルで電気泳動した。転写後 S4D、MAG、MBP に対するウエスタンブロット法を施行した。**電子顕微鏡** 60 日齢の野生型と S4D 欠失マウスを 0.5% グルタル含有パラホルムアルデヒド固定液で灌流固定後、通常の電子顕微鏡用標本作製をおこない、透過型電子顕微鏡で観察した。視神経などの軸索ならびに髄鞘の径を計測し、形態学的評価を行った。

【結果】

S4D 免疫陽性構造の分布と発現細胞の同定

成熟マウスにおける S4D 陽性細胞は、大脳皮質、脳梁などに広く分布していた。二重蛍光免疫組織化学の結果、S4D 陽性細胞は MAG、O4 陽性細胞の多くと一致したが、NeuN 陽性細胞、GFAP 陽性細胞、F4/80 陽性細胞とは一致しなかった。また NG2、PDGFR α 陽性細胞や GST π 陽性細胞とも一致しなかった。

脳成熟過程における S4D、オリゴデンドロサイトマーカーの発現変化とオリゴデンドロサイトの成熟に及ぼす S4D の影響

野生型大脳皮質では、MAG 陽性細胞数は 14 日齢から 60 日齢にかけて増加したが、S4D 陽性細胞数は 14 日齢に比べて 60 日齢で有意に減少していた。60 日齢における MAG 陽性細胞は大型/強陽性のものと小型弱陽性の細胞に分けられ、S4D/MAG 陽性細胞は前者の大型/強陽性を示した。ウエスタンブロット法でも 60 日齢における S4D 蛋白量の減少していた。

S4D 欠失型大脳皮質は野生型と比較して 14 日齢、60 日齢とも MAG 陽性細胞数が多くさらに染色性も亢進していた。また S4D 欠失型では MBP 免疫活性も野生型と比較して亢進していたことから髄鞘成分が増加していることが示唆された。NG2、PDGFR α 陽性細胞数は野生型と S4D 欠失型で顕著な差はみられなかった。

成熟 S4D 欠失マウスにおける軸索及び髄鞘の微細形態の変化

S4D 欠失マウスでは一部に髄鞘の過形成を認めた。また軸索径は野生型マウスと比較して小さく、G-ratio（髄鞘を含まない軸索径/髄鞘を含む軸索径）は小さかった。

脳虚血傷害後の神経再生過程における S4D の発現変化とオリゴデンドロサイト再生に及ぼす S4D の影響

野生型マウスでは一過性脳虚血後の梗塞周辺領域に S4D 免疫活性が一過性に亢進した。一部は同時に MAG 陽性であったが、MAG 陽性細胞数には有意な増加は認められなかった。しかし、S4D 欠失型では 14 日目において、MAG 陽性細胞が対照群に対して有意に増加していた。MBP 染色性も野生型マウスでは虚血前と同程度であったが、S4D 欠失マウスでは明らかに増強していた。

【考察】

1. S4D 陽性細胞は未成熟な髄鞘形成オリゴデンドロサイトや前オリゴデンドロサイトに特異的なマーカーと一致し、脳成熟に伴う発現変化も同様であったことから S4D は前オリゴデンドロサイトや未成熟な髄鞘形成オリゴデンドロサイトの細胞体及び突起に発現することが示唆された。
2. 脳成熟過程あるいは脳虚血傷害後の神経再生過程において欠失マウスでオリゴデンドロサイト前駆細胞数には変化を認めず、髄鞘形成オリゴデンドロサイト数や髄鞘成分が増加したのは、S4D がオリゴデンドロサイト前駆細胞から髄鞘形成オリゴデンドロサイトへの分化成熟を抑制するためであると考えられた。
3. 軸索及び髄鞘の微細形態の検討から野生型に比べて欠失マウスの髄鞘が厚く、過形成と考えられる形態異常を認めたことから S4D は髄鞘形成を抑制的に調節していて、正常な髄鞘形成に関与していると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究では、生体脳における Sema4D の機能解析を目的に、大脳での Sema4D の発現細胞を同定した結果、未成熟な髄鞘形成オリゴデンドロサイトであることが明らかとなった。さらに Sema4D 欠失による脳成熟過程あるいは脳損傷後のオリゴデンドロサイトおよび髄鞘の変化を検討した結果、Sema4D はオリゴデンドロサイトの成熟と髄鞘形成を抑制的に制御することが示唆された。

この論文は、生体脳における Sema4D の髄鞘形成への関与を明らかにしたものであり、博士（歯学）の学位の請求に値するものと認める。